

源氏物語には、100種を超える植物が登場します。

今から千年も前の時代に、一人の女流作家がこれほど多くの植物の名前を知っていたことにまず驚きますし、その植物を、鋭い観察力・洞察力によって文脈、特にヒロインになぞらえて表現していることに、紫式部の超天才性を感じます。

清少納言「枕草子」の「をかし」に対する「あはれ」のゆえんがよくわかります。

1 種類

・約 110 種類、うち木竹類 60 種類、草本類 50 種類。

2 季節別

- ・春 ウツギ キリ サツキ シキミ シダレヤナギ センダン トチノキ フジ
ノイバラ フタバアオイ マユミ モモ ヤマブキ ヤエヤマブキ ヤマザクラ
- ・夏 カワラナデシコ クチナシ クリ サカキ ササユリ シノブ タチバナ
ツユクサ ハス ハマオモト ベニバナ ホオズキ ヤブコウジ ワスレグサ
- ・秋 アシ(葦) オミナエシ(女郎花) ムグラ(葎)(→かぐら) キキョウ(桔梗)
キク(菊) モミヂ(紅葉) シオン(紫苑) ススキ(薄) フジバカマ(藤袴)
ミヤギノハギ(宮城野萩) カルカヤ(女刈萱)(→かぐや) ヨモギ(蓬)
クタニ(苦担)(→リンドウ(竜胆)) ワレモコウ(吾亦紅、吾木香)
ハハキギ(箒木)(かきぎ) ワタ(綿)
- ・冬 ウメ チョウジ クレタケ ツバキ コケ

3 観賞植物登場回数(廣江美之助 『源氏物語の植物』 から)

サクラ類	76回	マツ類	38回	ウメ	29回	フジ	20回	カエデ類	18回
ナデシコ	17回	タケ類	16回	オミナエシ	14回	キク	12回		
ハス	12回	シダレヤナギ	12回	オギ	10回	タチバナ	10回		

感性豊かな紫式部は、四季折々に眼にした植物を花の鑑賞だけではなく、わずかな香りを感じたり、根の連なりを観察したりなど、現代人が忘れ去ってしまった本来最も大切にすべき、アナログ的手法を基本に、物語の構想を練ったのに違いない、と思います。

源氏物語は、植物誌的にも高く評価すべき価値があります。

本日はどこまで彼女の観察眼に迫れるかわかりませんが、千年前の京都の植物に思いをはせてみます。

独自勝手解釈もありますが、お許しを！

講演者プロフィール

京都府立大学大学院客員教授、京都府立植物園名誉園長。専門は「樹木学」、「植物園学」。京都府立植物園第9代園長(2006～2010年)を務めたのち、同園より初の名誉園長の称号を贈られる。現在も現役園長時代からつづく「きまぐれ散歩」などの園内植物ガイドや大学での講義を通して、植物のさまざまな魅力・不思議・謎、また、教育実践の場としての植物としての植物園存在の重要性を発信し続けている。